

姥^{うば}うかれ

田辺聖子



新潮社版

田辺聖子
焼うかれ



新潮社版

姥おばうかれ

一九八七年二月一〇日 印刷
一九八七年二月一五日 発行

著 者 田タ辺ノ聖セイ子コ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一一

（編集部） 03—二六六—五四一一

振替東京四—八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価 一〇〇〇円

© 1987, Seiko Tanabe
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-313420-8 C0093

姥
う
かれ*
目次

姥	姥	姥	姥
	だ	鍍 ^メ	と
	て	ッ	ち
蛭	ら	金 ^キ	り
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮
119	81	43	7

姥

鴉

……

233

姥

ま

く

ら

……

195

姥

け

な

げ

……

157

装
幀
村
上
豊

姥
う
か
れ

姥
と
ち
り

まっさきに電話してきたのは、箕面みづのにいる三男の嫁である。

「もしもし、お姑さん、被害はありませんでした!？」

私はマンションの窓から東神戸の海を眺めつつ、朝食を摂とっているところであった。夏になると海も空も茫ぼやとして薄紫に霞かすみ、水平線はぼかされてしまう。天心に近づくにつれて、コバルトブルーの色が濃くなる。今朝はことにも往き交う船が多い。ざらざら光る水面に白い航跡が二つ三つ。

私はフリオ・イグレスアスの「人生を忘れて」のテープを聴きつつ、めでたい朝食をたのしみ、グレイプフルーツにスプーンを入れたばかりのところであった。フリオ・イグレスアスが来日したときの騒ぎが大変だったあまりに敬遠していたが、プームがおちついてから聞いてみると、なかなか、よろしきものである。で、二千八百円のテープを買い求め、朝食のBGMにしていると
いう次第。

この頃のキカイは精巧であるから、息づかいまで耳もとで聴くよう、スペイン語というのは甘くてやるせなく、色っぽいのである……。

そういう、いい気分だった時に、けたたましい電話、なんでこう現代というのはロマンチック

に浸らせてくれないようになってゐるんだらう。

「被害つて、ゆうべ地震でもありましたっけ」

と私はいう。

「地震じゃありません、戸板^{といた}商事の件ですわ、今朝の新聞にでかでかと。戸板商事に引っかけたおトシヨリがいつぱい、いると出てますでしょ！」

何を今さら、ビックリしているのだ。戸板商事のことはもうずいぶん前から新聞や週刊誌に載つており、べつに昨日今日の事件ではない。嫁などは新聞を見てもテレビ欄と、せいぜい家庭面がせい一ぱいであるうから、ことあたらしく驚くのだ。

「パパが、もしかしてお姑さんも被害にあわれたんじゃないかって、心配するものですからね、どうなんですかッ、お姑さん！」

嫁は昂奮のあまり、息切れしているようである。

「大丈夫とは思いますが、シツカリしていらつしやるようでもお姑さんもおトシヨリですからね、根は甘いんじゃないかと、と——いえ、これパパがいうんですけど、根甘^{ねま}につけこまれていらつしやるんじゃないかと、急に心配になつて、ゆうべ、パパもあたしも眠れなくて……朝一ばんに電話してみるとパパがいうもんですから。何たつて、戸板商事は独り暮らしのおトシヨリをねらい落すのが巧かつたそうじゃありませんか」

私はダンダン、腹が煮えくりかえってくる。

トシヨリ、トシヨリ、と二タ言めにいうのが氣に喰わぬ。こう見えても私やツウのバアサンではないつもりだ。そんじよそらのトシヨリと十把^{じゅうば}ひとからげにしないほしい。根甘とは何ぞや。私が根甘なら、息子や嫁らは根欲^{ねよく}であらう。

彼らが、ゆうべ心配で眠れなかったというのは、私の財産が彼らに遺産として残された場合、少しでも目減りしないように、というおもんばかりからに違いない。

戸板商事というのは強引な悪徳商法で金を集め、倒産状態になっている悪評たかい会社である。金取引やゴルフ会員権をすすめてうまい儲け口を示唆する。私のところへも女の声で電話が掛つたが、私へかかつてくる電話はたいてい、「山本先生」「歌子はんでつか」「オ母ちゃん」（これは息子らである）「お姑さん」（嫁らである）にきまつており、「奥さま」とか「おばあちゃまですか、いま、おひとり？」などという電話はない。「奥さま」なんていう電話はみな、臭い。昔、船場の店に勤めていた古い女中衆さんのお政はんなどは、いまでも、

「ご寮人さん」

と電話してくるけれども、いやになめらかな声で、

「奥さま、あの、失礼ですがお宅さまでは……」

などとかかつてきた電話にロクなのがないことは経験上、よくわかっているのだ。それより電話で金もうけをもちかけるというところが、私には大胆不敵に思われる。

金もうけというのは、もちかけられるものではなく、自分からもちかけるものである。待っていて入ってくる金もうけというのは、西鶴の時代からないのだ。もうけようと思えば、自分から働きかけないといけない。

それゆえ、私はそのたぐいの電話がかかると、

（誰にかけてる思てんのや）

と片腹いたく、

「いま忙しいんですよ」

とすぐ切ってしまう。

だからそのたぐいの電話から受ける被害はかいもくはないのであるが……あんまり、三男の嫁が息せききって訊いてくるのがおかしくて、ちよつと黙っていたら、

「もしもし、もしもし、お姑さん、どうなんですか、戸板商事に引つかったんですか、引つからなかつたんですか!？」

嫁は不吉な予感におびえ、半分、泣き声である。

こういう声を聞くと私のイタズラ心が、むくむくとあたまをもたげてくるから困ったもんだ。

「実はねえ、須美子さん」

私は声をしめらせていう。

「まあ、七十八になつて私や、氣をつけていたつもりやけれど……」

「ひえっ」

と嫁は電話口の向うで息をのんだあんなばい。

「やつぱり!」

「いえ、須美子さん、それはね……」

「だから、いわないこつちや、ないんですよ! あたしたち、大体、お姑さんがそのトシで、株だ債券だと大胆なことなざるの、ハラハラしてたんですよ」

「いえ、株はあなた、この頃はもう……」

「大変だわ、それでどのくらい、お姑さん、戸板に持っていかれたんですか!？」

私はつむじまがりなところがあるから、そういわれると、こう出てしまう。

「すつてんでんですよ」

嫁は一声絶叫して、即、電話を切ってしまった。私は思わずにやにやとこぼれる笑みを抑えようもない。どうもこの、嫁をからかうという悪癖のたのしみをやめられないのが私のよろしくないところ。

おかげで午前中、電話さわぎで過ぎてしまった。

「戸板一〇番、というのがあるんだそうですね、お姑さん？」

「いつてきたのは豊中とよなかにいる次男の嫁である。」

「被害者の相談に乗ってくれるそうですよ、もう電話なさいました？」

私が戸板に引つかかったらしいという噂は息子ら及び、嫁らの間で電光の如くすばやく知れわたり、彼らはたちまち私の財産を疝氣せんきに病んでさぐりを入れてきたらしい。

「もしまだでしたら、あの、あたしが代りにしましょうか、金の証書きんしよですか、レジャー設備の投資ですか、お姑さん、そんなもの、二足三文ですよ、そんなもの！」

次男の嫁も声がうわずり、一オクターブ高くなっている。そればかりか嫁は、

「何てことを……まあ……」

しゃくりあげはじめた。

「いえ、道子さん、嘘ですよ、冗談。私やそれほど、もうろくしてませんよ、戸板商事なんて関係ないんですからね、心配しなさんな」

「いえ、お姑さん、お隠しにならなくてもいいですよ、それならそれで弁護士を頼んで、早いこと、手を打ってもらいましょうよ、一刻も早いほうがいいですわ、あたし、パパの会社へすぐ電話しておきます」

「道子さん、これ……」

という間に、次男の嫁は錯乱状態で電話を切ってしまう。自分の財産でもないのに、あの取り乱しような何ということであろう。

そこへまた電話、誰かと思えばこれは、

「ご寮人さんでつか、お政でござりま。お暑うございますなあ、お元氣でお変りも無うおいでですか」

とのんびりしたお政どんの声、思いついた折々に見舞の電話をくれる。あれこれしゃべってついでに私は、

「さつきから嫁らが煩そうてかないまへんや、あの戸板商事で引っかけられなんだか、いうてなあ」

と笑いながら話してしまう。

「ほっほっほ。ご寮人さんにそんなことがおありになるはずはおまへんがな。いえ、ワテらみたいに欺されるような財産もないためと違うて、ご寮人さんは欲がおありやおまへんよつてに。

……また、たとい、引っかかりやはりましても、それは厄落し、いうもんでござりま。厄払うて、とうない長生きしやはりまつしやろ。ほっほっほ」

お政どんは放胆なことをいって電話を切る。

それで私ものゝんびりした心持で居たら、次にかかった電話は次男からである。この男はガミガミ言いであるから、

「ワシや」

というのを聞いたとたん、私は、雷が落ちるようにガミガミいわれるのかと思ったが、奇妙にも猫なで声で、

「あのなあ、オ母ちゃん」

という。

オ母ちゃん、というがこの息子はもう五十にもなる、鉄鋼会社の部長である。

「怒らへんさかい、言いいな」

「何をですねん」

「何ぼ損したか、ちゅうとんねん」

「何を」

「何を、て戸板商事で何ぼ持っていかれた、ちゅうて聞いとんねん。そら、言いいやろけど、ワシ、按配するさかい、言いいな」

「私やなにも……」

「そんなこつちゃ、ないか、思てん！」

次男はやにわに猫なで声をかなぐり捨て、たけり狂って怒号する。

「かねがね、思とったんや、トシヨリが金握ってたら危い、て。そやさかい、ワシ、管理するする、いうてんのに、オ母ちゃん聞けへんのやないか！ みい！ ワシに預けとったらそんなことさせへんかったのに」

「ちよつと待ちなさい、まあ落ちついて」

「これが落ちついてられるかい、今晚行くさかいな」

「来んでもよろし、私や何も損してないのやから」

「内緒にしたい気持はわかるけど、それではすまん。兄貴のとこへもちよつというとか。いま九州へ出張しとるそうやけど、連絡しときまっさ」